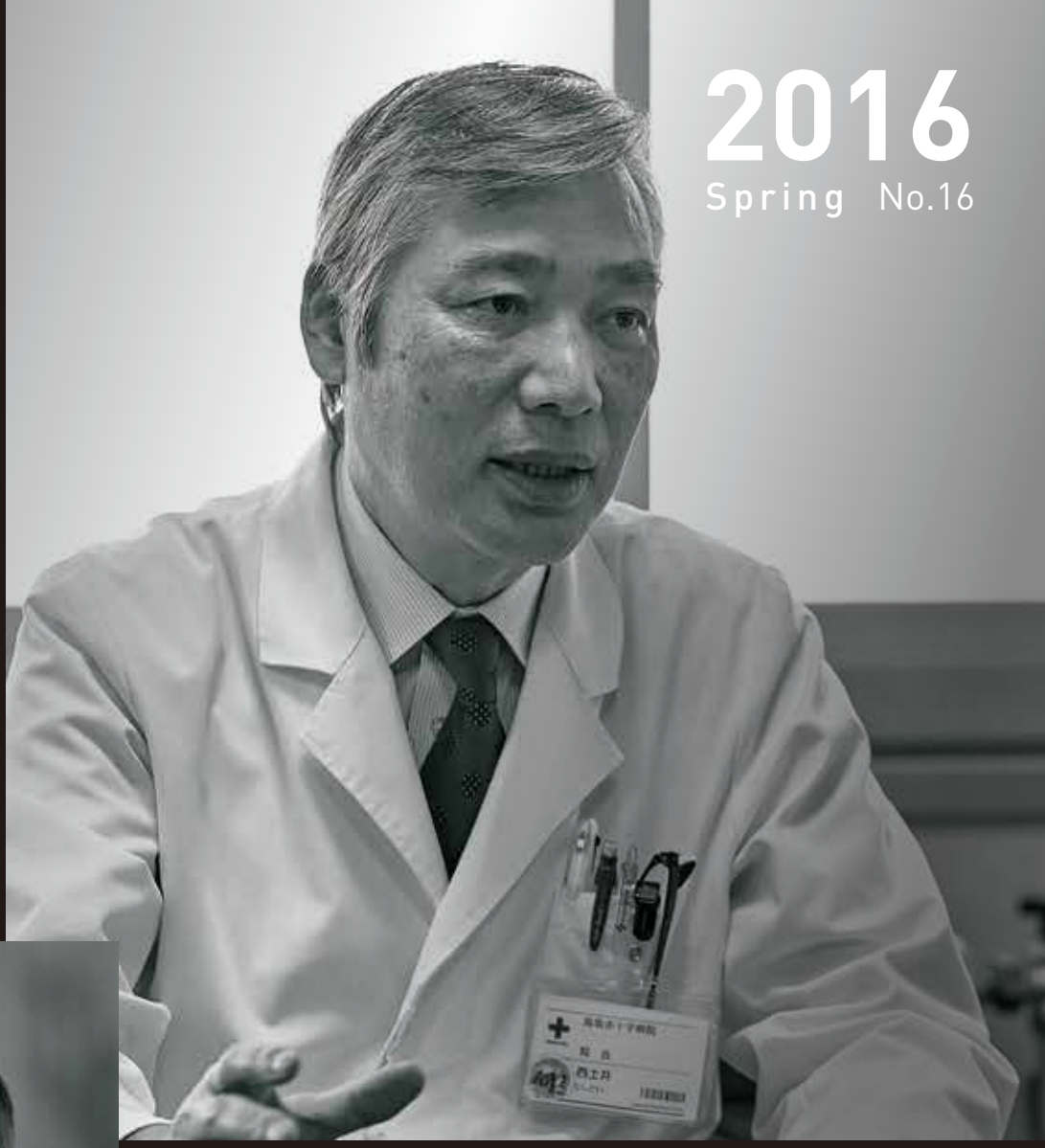
KLINIKOS

とっとりの医療【クリニコス】
2016 春号

2016
Spring No.16



このみずみずしさを未来へ
鳥取県

スペシャルトーク
鳥取赤十字病院 院長
西土井 英昭 氏

この医師にせまる
鳥取大学医学部附属病院
総合周産期母子医療センター
ワークライフバランス支援センター
センター長
神﨑 晋 氏

女性医師の視点
鳥取大学医学部附属病院 小児科
金子 祥子 氏

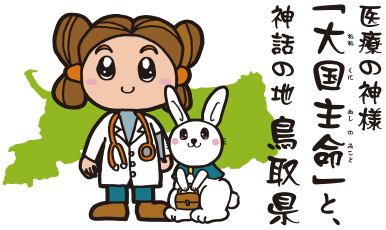
鳥取の病院から
医療法人社団
尾﨑病院

鳥取の研修医たち
山陰労災病院

白兎神社
神話「因幡の白うさぎ」の舞台であり、古事記や日本書記でも紹介されている神社。神話にちなみ、皮膚病ややけどなどに効く神社として信仰されています。

KLINIKOS

とっとりの医療
【クリニコス】
2016 春号



小さな「ありがとう」のために、大きな夢をのせて…
鳥取県が舞台と言われている神話「因幡の白兎」で、傷ついた兎を救った大国主命は、医療の神様とされています。

とっとりの医療

『KLINIKOS（クリニコス）―とっとりの医療』は、
鳥取県で展開されている医療の魅力を、現役医師の皆さんの生の声で伝える広報誌です。
県内の医療機関ではどのような医師が活躍しているのか、どのような研修、チャレンジができるのか、
素晴らしい先生方の取り組みや想いを、特に若い医師や医学生に発信したいと考えて制作しました。

ギリシャ語の「klinikos」は英語／clinicの語源ともなった言葉で、
患者に対する医療行為を意味し、米語辞書の代名詞的存在であるウェブスター辞典では、
「臨床講義」や「臨床講義室」をさす言葉として紹介されています。

この冊子に紹介されている先生方や医療機関の取り組みに
興味を持たれた方は、ぜひ現場を見学してみてください。
願わくば、この冊子が鳥取県で研修、勤務いただくきっかけになれば幸いです。

鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課

休刊のお知らせ

2010冬号の創刊以来、皆様に御支援を頂戴して参りました「KLINIKOS」ですが、今号をもちまして休刊することとなりました。
今後も鳥取県の医師確保に努めて参りますので引き続き御理解と御協力をお願いします。

米子水鳥公園

山陰屈指の水鳥の生息地である中海東端に位置するバードサンクチュアリ。広さ約28ha、国内で確認された野鳥のうちおよそ42%の種類が記録されています。

Contents

02 **Special Talk** スペシャルトーク
鳥取赤十字病院 院長
西土井 英昭 氏
地方であっても全国レベルの医療を提供できる体制づくり。それが私の大きな課題です。

06 **Doctor of Topic** この医師にせまる
鳥取大学医学部附属病院
総合周産期母子医療センター ワークライフバランス支援センター
センター長 神﨑 晋 氏
地域の周産期医療を支える手厚い体制づくり

09 **Close Up Women's** 女性医師の視点
鳥取大学医学部附属病院 小児科
金子 祥子 氏
出産・育児のため、2度の離職と復帰を経験

12 **Doctor's File** 鳥取の病院から
医療法人社団
尾﨑病院
高齢者の人生をサポートするための取り組み

15 **Our Story** 鳥取の研修医たち
山陰労災病院
高校生の時に児童精神科医を目指す

Access

鳥取県へのアクセス

Staff Credit

発行 ―― 鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課
(http://www.pref.tottori.lg.jp)
編集制作 ―― 【民間医局】株式会社メディカル・プリンシプル社
(http: //www.medical-principle.co.jp)
ディレクター ―― 山之口 正和
ライター ―― 藤本 勉
カメラマン ―― 河野 義彦
デザイナー ―― 田尻 博美

スペシャルトーク

Special Talk

Hideaki Nishidoi

地方であっても全国レベルの医療を提供できる体制づくり。それが私の大きな課題です。

鳥取赤十字病院 院長

西土井 英昭氏

Hideaki Nishidoi

手堅い手術こそが良い手術

鳥取県東部の中核病院であり、2015年に創立100周年を迎えた鳥取赤十字病院。節目の年に院長に就任した西土井氏に、鳥取の医療、100周年への思い、若い医師へのメッセージなどを伺った。

西土井氏が医師を目指したのは「専門性」の高さに魅力を感じたからだ。子どもの頃から、道を究める職業に魅力を感じていた。それは木工職人でも弁護士でも良かったそうだが、次第に医師に気持ちが傾いていった。「子どもの頃に骨折の経験が3度もあり、それで病院に興味を持ったということはあるかもしれません」。医師になり、選んだ専門科は消化器外科だった。「鳥取大学医学部附属病院の第一外科は、診断も治療もする場所でした。そこに一番の魅力を感じ、迷わず選びました」。内視鏡、レントゲン撮影、超音波診断なども自分で行い、メスも握った。医局全体がそのような姿勢の場所だったのだ。

当時、西土井氏が最も影響を受けた医師は、医局の助教授(現在の准教授)だった。「若い外科医は、華麗な手術、格好いい手術ができるのが良い医者だと思い込んでしまうところがあります。短時間で終えることや、出血を少なく抑えることなどを誇示してしまうのです。しかし、私が師事した先生は、手堅い手術をする方でした」。医師として大事なことは、患者を治すこと。西土井氏は、良い手術とは、手堅い手術、間違いのない手術をすることだと肌で感じたそうだ。

地域の医療環境をより良いものに

「日本で腹腔鏡手術が学会で発表されたのが1990年。翌年にはこの病院でも導入しました」。最初はコツがわからなかったが、浜松医科大学で体験し、〝霧が晴れたように〟理解できた。2014年にはダヴィンチS(手術支援ロボット)を導入。常に最新の環境を整えることに注力している。「例えば、鳥取東部の患者さんが前立腺の手術のために鳥取西部にある

新棟の手術室。ダヴィンチSはここで使用される。

鳥取大学医学部附属病院に入院しなければならないという状況は、患者さんやその家族に大きな負担がかかります。東部地域の方も、大学病院と同等の治療が受けられる環境をつくるのは、この病院の責任であると考えています」。

地域医療を充実させるための取り組みとして、鳥取県立中央病院との役割分担を明確化させる取り組みも行っている。2016年から利用されている新棟には、消化器病センター、内視鏡センター、頭頸部外科センター、リウマチセンターを設置。専門性の高い医師を採用し、患者本位の診療体制を整えた。また、産科、小児科、緩和ケアの病棟はすべて個室になり、セキュリティの高い病棟となった。「これまでの病棟は昭和30年代、40年代に建てられたもので、療養環境という面では患者さんにご迷惑をかける部分もありました。新棟では、スタッフと患者さんの動線を分けることで、プライバシーに配慮したり、フロア全体を見渡せる位置にナースステーションを設置することで、緊急時の対応もよりスムーズになります」。また、産科の充実には地域の事情もある。地域の産婦人科医が高齢化し、リスクの高い出産の受け入れが難しくなり、同院で受け入れるケースが増えている。

「人道・博愛」赤十字の理念を大切に

地域の方にとって、重い病気や急な病気のときに頼りになるというのが西土井氏の求める鳥取赤十字病院の姿だ。「人道・博愛が赤十字の基本理念です。当院の職員には、この理念を持っていて欲しいと思っています。具体的には、困った人がいたときに手を差し伸べる、災害があれば率先して救助に向かうといったことです」。同院の看護師たちは、とくに赤十字の職員である意識が強いそうだ。すべての職員が赤十字の理念を胸に、誇りを持って働ける場所であって欲しいというのが西土井氏の理想である。

1915年に開院した同院は2015年に100周年を迎えた。「病院経営は良いときも悪いときもありますから、100年間続いているということだけを見ても先人たちの大きな努力を感じます」。節目の年に院長に就任した西土井氏。100周年という長い時間への感慨と同時に、記念事業が職員の結束に役立ったと感じている。「100周年記念式典を行い、次に地域の方を招待して、鳥取赤十字病院100周年感謝祭を行いました。この感謝祭の計画や運営を通じて、すべての職員が結束したと感じています」。感謝祭では、職員たちが手作りの催し物を行い、多くの市民で賑わった。さらに、病院に関わるすべての方に西土井氏のメッセージ入りクッキーを配り、感謝を伝えた。

医療の質を上げるための人材育成

最新機器の導入、設備の充実、職員の意識や心構えなど、病院全体の質の向上に取り組む根底にあるのは、地域全体の医療の向上だ。「地方であっても、全国レベルの医療を提供できること。地域の患者さんが安心して地元で治療できること。この体制づくりが重要です」。この考えに沿って、人材育成にも取り組んでいる。日本赤十字の病院は全国で92カ所。この大きなネットワークを活かした研修制度がある。例えば救急医療では、初期研修時に2カ月間高知赤十字病院で研修を行う。「高知赤十字病院は救急医療が充実しています。この研修を終えて帰ってきた研修医は顔つきが変わっています」。救急医療の充実は鳥取県東部全体の課題だ。また、地域医療支援病院に認定され、地域の医療機関との連携が進んでいる高山赤十字病院でも、1ヵ月間の地域研修を義務付けている。有効な研修を行い、人材の芽を育てていくのは西土井氏の課題でもある。後期の専門医としての研修でも、各地の赤十字病院で得意としている専門科での研修が行われている。症例が多くあるため、技術と知識が蓄積されると同時に、研修先の病院の人手不足の解消にもなるのだ。

病院の職員だけではなく、清掃や警備など外部のスタッフにも配られた西土井氏のメッセージ入りクッキー。

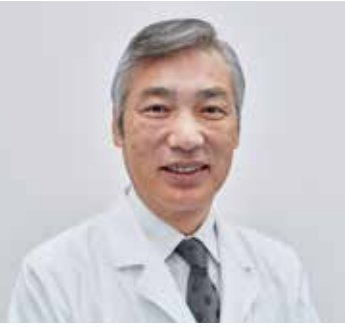
100周年記念式典

「温故知新」。過去も知りぶれない目を

西土井氏の座右の銘は「温故知新」。これはそのまま若い医師へのメッセージでもある。「常に新しいことを勉強し、自分のものにしていくことは大切ですが、古いことも知っておくべきだと思います。新しい治療法、新しい技術が出てきても、それが正しいかどうかは、自分で検証していく必要があります。いま正しいとされていることも数年後には否定されているかもしれません。ぶれない目を養うことです」。新しいものが正しいのかどうか、判断するときの基準のひとつが、過去の事例や技術だということだ。

「良い医者の条件は人間性とコミュニケーション能力です。これがなければ、診断も治療も進みません」。日々の勉強と同時に人間性も磨いていくことが、医師として大切なことだと考えている。

Profile



鳥取赤十字病院 院長
西土井 英昭 にしどい ひであき

1976年　鳥取大学医学部卒
1976年　鳥取大学医学部附属病院
1978年　済生会江津病院
1978年　鳥取大学医学部附属病院
1982年　国立米子病院
1983年　鳥取大学医学部附属病院
1990年　鳥取赤十字病院
2005年　同副院長
2015年　同院長

外来での診察の様子。穏やかな表情で患者に接する。

Doctor of Topic

この医師にせまる

鳥取大学医学部附属病院
総合周産期母子医療センター ワークライフバランス支援センター
センター長

神﨑 晋 氏

Susumu Kanzaki

2006年に設置され、鳥取県内や島根県東部からの患者を受け入れている
鳥取大学医学部附属病院総合周産期母子医療センター。
MFICU（母胎・胎児集中治療室）6床、NICU（新生児集中治療室）12床を備え、
充実したスタッフと地域の病院や診療所との連携で、新しい命の誕生を支えている。

父親も小児科医だったという神崎氏。
医師を志したのは、高校2年生ぐらいのときだった。

地域の周産期医療を支える手厚い体制づくり

地域の産婦人科や小児科から、高度な医療が必要な患者を受け入れ、治療を行う鳥取大学医学部附属病院の総合周産期母子医療センター。MFICU、NICUなどを備え、産科や新生児科、脳神経小児科、小児外科などの専門家により、妊娠中から産後、そして新生児のケアを総合的に行っている。同センターのセンター長であり、小児科の教授である神崎氏に同センターの役割などを伺った。

同センターの設置は、厚生労働省の周産期医療対策事業に基づいたものだが、当初は人口100万人あたり1カ所のセンターを設置するという指針があったため、人口の少ない鳥取県への設置は困難を極めた。「鳥取県医師会を中心に、鳥取県、県内の各市町村のご理解とご協力があって設置することができました」。

「現在最も問題になっているのは、低出生体重児のケアです。出生率がかつてよりも低くなっているにもかかわらず、低出生体重児の数は増えています。出産の高齢化によるものと考えがちですが、20代の母親の出産でも増えています。これは、20代女性の〝痩せすぎ〟によって、胎児に栄養が行き渡らないことが原因ではないかと考えられています。先進国では珍しいことです」。例えば妊娠26週での出産など、かつての医療水準では救えなかった新生児もいるため、統計的に数が増えているという側面もあるが、現代社会のあり方を改めて考えさせられる現象だ。また、出産の高齢化に起因する母体や新生児の異常も多く、同センターの存在は、地域にとって大きなものとなっている。

県内および島根県東部からも患者を受け入れている同センター。「小さく産まれるとわかっている患者さんが出産前に当センターに入院するのが理想的」ではあるが、新生児の状態が悪く、同センターに連絡が入ることも多い。「狭い範囲にはなりますが、近隣の産婦人科で生まれた子どもの状態が悪い場合、当センターの医師2名が保育器を持って駆けつけます」。派遣された医師がその場で診療を行い、状況によって同センターに入院させるか、そのまま出産した医療機関で治療を続けるか判断する。同病院には常に2名の小児系当直医がいて、さらにNICU専任の当直医も1名配置されている。十分な人材がいるからこその手厚い体制といえる。また、医療機器も最新のものを備え、機器の問題でできない手術は、高度な心臓手術だけとのことだ。

診療中の様子。「子どもは正直、しんどいときはしんどい顔をする」。注意していることは「親の話をしっかり聞く」こと。

人材育成、人材確保、地方の医療現場が抱える問題解決のために

手厚い人材配置を支えるのは、医師や看護師、助産師などの教育体制だ。「センター内のどのグループも国内留学で技術を高めています。東京などで最先端の技術を学ぶ道が開かれているのです。また、助産師の場合は、当院だけでは症例が少ないことから、山口日本赤十字病院で研修を行い、多くの症例を経験できるようにしています」。

同センターのトップとして、忙しい日々を送る神﨑氏には、もうひとつの重責がある。ワークライフバランス支援センターのセンター長という役割だ。都市部では、医師の数は十分だが、地方では大学病院であっても人材難という状況がある。そこで、出産や育児によって医療機関を辞めてしまった女性医師の現場復帰を大きなテーマに、ワークライフバランスの制度が始まった。「女性は医師に限らず、キャリアアップの時期と出産や育児の時期が重なる傾向があります。鳥取県からも女性医師の職場復帰に対する要請があり、その支援が大きなテーマになりました。病院は看護師も含め、女性が多い職場ですから、この取り組みは医師だけではなく、すべての職員に広がっていきました」。現在では、男性も含めたワークライフバランスを支援するのが、支援センターの目的になっている。育児だけではなく、介護やメンタルヘルスの問題も支援している。病院の敷地内には、保育所を設置して、深夜保育、病児保育も行っている。病児保育では、同院の小児科医がすぐに駆けつけられる体制がとられており、夜勤があるスタッフも安心して働ける環境が整えられている。

「2016年からは学童保育も始めています。学童保育を行っている事業所はあるのですが、夜間までとなると、ほとんどありません。良い待遇により良い医師やスタッフが集まり、人が集まることによってまた良い待遇ができるという循環になることが理想です」。実際に結婚や育児を理由に辞める看護師は大きく減っている。また、夕食持ち帰りサービスなどもあり、家庭と仕事の両立を支えるさまざまなサポートが行われている。

鳥取大学医学部附属病院
総合周産期母子医療センター
ワークライフバランス支援センター
センター長
神﨑 晋 かんざき すすむ

医学博士
日本小児科学会　専門医・指導医
日本内分泌学会　内分泌代謝科（小児科）専門医・指導医

1979年 岡山大学医学部医学科卒業
1985年 岡山大学大学院医学研究科修了
1985年 国立岩国病院医長（小児科）
1993年 岡山大学医学部附属病院講師（小児科）
1999年 鳥取大学医学部教授
（小児科学（周産期・小児医学））

「一隅を照らす」人々を応援する気持ち

「一隅を照らす」が神﨑氏の座右の銘だ。「それぞれの立場で頑張るという意味のこの言葉は、地方で医師をしている私に合っているという感じがします」。自身に向けられた言葉ではあるが、同時に「一隅を照らす」人々を応援したいという気持ちも表している。

総合周産期母子医療センターでの地域医療との関係づくり、ワークライフバランス支援センターでのスタッフ一人ひとりの立場に立った支援体制は、正に「一隅を照らす」人々のためのものだ。

鳥取大学
医学部附属病院

「健康の喜びの共有」を理念に掲げる鳥取県西部の中核病院。最重症の母体と新生児のケアを「総合的」に行うことができる医療施設を目指し2006年に総合周産期母子医療センターが設置された。

「大人の病気は治すのが難しく、延命や維持が目的となる場合が多いが、子どもは治すことができる」。そこに大きなやり甲斐を感じている。

女性医師の視点

出産・育児のため、2度の離職と復帰を経験。

金子祥子氏

Shoko Kaneko

鳥取大学医学部附属病院 小児科

金子祥子氏は、鳥取大学医学部附属病院の総合周産期母子医療センターに勤務する小児科医。出産や育児のため4年近く医療の現場を離れていた経験を持ち、同院の職場復帰支援システムを利用して、2013年に職場に復帰し、仕事と家庭を両立させるために、忙しい日々を送っている。

家族の力を借りて乗り切った最初の復帰

金子氏が医師を目指したのは、父親が整形外科の開業医だった影響が大きい。いずれ父親の医院を継ぐことを念頭に金沢医科大学の整形外科に入局したが、まもなく出産のために職場を離れた。

元々は整形外科としてしっかり働き、子育てもしたいと考えていた金子氏だが、医療現場に戻ることを考えたときに、「誰かのサポートが必要」だと考え、実家のある鳥取に戻り、2007年、鳥取大学医学部附属病院の小児科に入局した。

「実家の医院は夫が継いでくれることになりました。そこで、かねてから興味のあった小児科に入局しました」。整形外科から小児科という時点で、かなりの回り道だった上に、ブランクもあるということで、当初は大きな不安があったという。このときは職場復帰支援システムはまだ存在していなかったため、

女性医師の視点

自分のプライドは捨て、患者第一で行動する。

総合周産期母子医療センターのスタッフ。医師、看護師に加え、保育士も勤務している。

子どもの世話は母親に任せていた。「帰宅が深夜になることも多く、母親なしでは乗り切れなかったと思います。母親にはだいぶ迷惑をかけました」。それでも努力を重ね、当直を任されるような立場になったものの、出産や子育てのため、2009年には再び現場を離れることになった。

職場復帰支援システムに後押しされた2度目の復帰

約4年間にわたって、医療現場を離れることになった金子氏。その間にも職場復帰の誘いは何度かあった。「病院へのお誘いは何度か受けました。しかし、一度現場を離れると、しんどい思いがよみがえり、復帰にはためらいがありました。また、子どもが4人いるということも大きかったと思います。医者はたくさんいますが、子どもの母親は私一人しかいない、と自分を抑えているようなところもありました」。現場への復帰までには、さまざまな葛藤があったのだ。最終的に復帰を決めたのは、同じ職場復帰支援システムを利用して復帰した医師の話を聞くことができたからだった。「実際の経験を聞くことで、大きな後押しになりました。現在は実家を離れ、夫と子ども4人で暮らしているため、以前のように母親のサポートを念頭に置くことはできません。ですから、本当に仕事と家庭を両立できそうかどうか、女性医師を歓迎してくれているかどうかなど、不安に思っていることを確認することができました」。

鳥取大学医学部附属病院には、育児・介護・メンタルヘルスケア・健康管理・職場復帰などの面で職員を支援する「ワークライフバランス支援センター」が設置され、その取り組みや成果はテレビ番組などでも取り上げられている。

職場復帰支援システムは鳥取県と同院の連携事業で、育児・介護等で休職中の医師が、ブランクを心配することなく復帰できるよう、手技・知識等について、研修プログラムを用意している。

患者に不都合なことが絶対ないように

現在、原則として平日の9時から5時まで勤務している金子氏。そのため、夜も付き添わなければならないような重症な患者は診ることができない。しかし、重い症例を担当することだけが医師の役割ではないと考えている。「他の先生は一年でどんどんキャリアアップしていきますが、私のスピードはゆっくりです。それでも私が軽症の患者さんを診ることで、他の先生が重症の患者さんに集中できます」。年齢的には後輩にあたる医師にアドバイスを仰ぐことも多いという金子氏。医師として大切なことは、「患者さんに不都合なことが絶対ないこと」だと考えている。自分の判断で症状が悪化することがないように、自分が担当しきれないと思ったら、なりふり構わず人に聞くという姿勢を貫いているのだ。症状が良くなることが第一であって、自分のプライドは捨てるという姿勢だ。

女性医師が働き続けるにはリサーチが大切

「女性医師は、キャリアアップの時期と結婚や出産を考える時期が重

鳥取大学医学部附属病院

「健康の喜びの共有」を理念に掲げる鳥取県西部の中核病院。育児・介護・メンタルヘルスケア・健康管理・職場復帰など、職員を支援し、快適な職場環境を整備するため2010年に「ワークライフバランス支援センター」を設置。

〒683-8504 鳥取県米子市西町36-1

総合周産期母子医療センターの新生児治療回復室で診療にあたる金子氏。

なります。ですから、ずっと医師として働きたいと思う方は、色々なことをリサーチしておく必要があると思います」。夫の考え、家族のサポート、子育てのサポート環境、短時間の勤務が可能か、勤務する病院や医局が本当に女性医師を歓迎してくれているのかなど、女性医師が仕事と家庭を両立させていくためのハードルは決して低くない。

「今はしっかりした環境を整えてもらっていますが、それでもしんどいことはあります。朝の仕事の始まりと帰宅してからの家事の始まり。一日のスタートが2回ある感じです」。仕事と家庭を両立させるため、めまぐるしい日々を過ごす金子氏。一番欲しいのは「一人になる時間」だと語る笑顔に、日々の充実の様子が窺えた。

「ワークライフバランス支援センター」の相談室。すべての職員が対象で、育児や介護などの相談にいつでも応じている。

Profile

鳥取大学医学部附属病院 小児科

金子 祥子 かねこ しょうこ

2002年　金沢医科大学卒業
2004年　臨床研修課程修了
2004年　金沢医科大学整形外科入局
2004年　同上退職
2007年　鳥取大学医学部附属病院小児科入局
2007年　米子医療センター勤務
2009年　同上退職
2013年　鳥取大学医学部附属病院小児科勤務

Doctor's File

鳥取の病院から

医療法人社団

尾﨑病院

鳥取空港から車で数分、鳥取市湖山町。多くの学校が集中する文教地区に位置する尾﨑病院。
透析センターや健診センターを備えた病院に加え、
通所リハビリテーションや訪問看護ステーションも運営し、
「人生後半のトータルサポート」を理念とした地域の高齢者を支える病院だ。

高齢者の人生をサポートするための取り組み

「人生後半のトータルサポート」を理念に掲げ、地域の高齢者が安心して相談できる病院を目指している尾﨑病院。医師であり法人の理事長でもある尾﨑舞氏に、尾﨑病院の地域での役割、今後の活動指針などについて伺った。

「人生後半は、色々な技術を持った人のサポートが必要になります。私たちのような小さな病院では、それがやりやすいと感じています」。高齢者が安心して暮らすには、医師や看護師、理学療法士などの医療に関わるスタッフだけではなく、介護に関わるスタッフとの連携が必要になる。医療や介護に関わるサービスをスムーズに提供していきたいというのが、同院の理念の中心になっている。

理念を端的に表しているのが同院のロゴマーク(図)だ。中心の円は「ひとりの人」、周りの円は尾﨑病院にある「12の部門」を表現し、尾﨑病院全体でひとりの患者を支えていくという姿勢を意味している。

医療と介護の連携を取り、地域の人をサポートしていきたいという同院だが、医療スタッフと介護スタッフの間には見えない壁が存在しているという。その壁を解消するために、介護スタッフの中で、看護師長のような役割を決め、病院と折衝できるような人を育成したいと考えている。「介護スタッフが意見を言えないと、言いなりで働くようになり、気づいたことを改善する機会が失われます」。介護スタッフが発言できる環境づくりが、同院の理想に近づくためのひとつの手段と捉えられている。

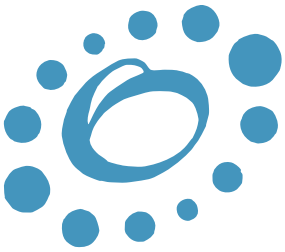


図 ロゴマーク

治療や予防などを目的に行われるユニークな取り組み

現在、同院で行われている特徴的な治療のひとつが「腎臓リハビリ」だ。これは人工透析中に行う運動療法で、目に見える効果がある。人工透析の開始から1時間ぐらい、状態が安定したところで、エルゴメーターを用い15分程度の運動を行う。体力が落ちるのを防ぎ、QOLを向上させる効果があるそうだ。「九州の病院では取り入れている所が多く、実施にあたっては、九州で実地訓練を行いました。この地域で取り入れているのは、尾﨑病院だけだと思います。効果が分かりやすいので、患者さんたちのモチベーションも上がるようです」。合い言葉は〝いつまでも、自分の足で透析室へ〟。この取り組みは全国的にも広がりを見せている。

また、罹患率が高いにもかかわらず、受ける人が少ない乳がん検診にも力を入れている。少しでも抵抗なく受けてもらえるよう、女性医師である尾﨑理事長と女性のレントゲン技師により実施。毎年10月の第三日曜日に行われるJ.M.S(日曜日に乳がん検査を受けられる日)の活動にも参加している。

「出前講座」も同院ならではのユニークな取り組みのひとつ。地域の人たちに医療の知識を活用して欲しいという思いで始められた活動で、腰痛予防、認知症予防など17の講座から希望の講座を選べる仕組みだ。公民館や介護施設などで行われることが多い。講座を行うスタッフも楽しんで行っている。

また、「美楽食(びらくしょく)」の取り組みもユニークなものだ。患者の食事を見ていて「食べにくそう」と感じたところから始めたこの取り組み。実際に病院で出される食事を試食したり介護用の食器を試したりすることで、スタッフ全員の意識が高まっている。患者からの申し出がなくても、スタッフの気づきで食事とその環境が改善されていく仕組みだ。

人工透析中のリハビリテーション。ベッドにおけるサイズのエルゴメーターを使用。

開放的なナースステーション。

運動療法を行うリハビリテーション室。

Doctor's File
鳥取の病院から

働く女性のワークライフバランスをケア

スタッフの努力が埋もれてしまわないように報告書には返事を書くという尾﨑氏。

看護師や介護スタッフなど働く女性が多いのはどこの病院にも言えることだが、同院では、保育園の費用を補助することで、働く女性への支援を行っている。通常の保育料以外の部分の全額補助がそれだ。「休日、夜間、病児さらに学童保育についても全額補助しています」。これにより、育児を理由に辞める人が大きく減った。また、女性医師の働き方にも幅を持たせる努力をしている。パート勤務も認め、午前中だけ、外来だけなど、各医師の実情に合わせて勤務形態が選べる制度がある。

このような制度は、独身のスタッフや男性には適用されないため、全員に適用される制度も実施している。「自分磨き手当」は、例えばNHKなどの講座を受講すると一定の費用を補助するというもの。まだ利用するスタッフは少ないそうだが、同院の人に対する考え方が表れている一例だといえる。

「24時間笑顔で診る」ことを実現するために

尾﨑病院が進める3つの柱の基本的な考え方は、地域の患者を「24時間笑顔で診る」という目標を前提にしたものだ。検診や外来を強化することによって、病気を早期に発見すること。リハビリを強化することにより、より早い在宅復帰を促すこと。在宅でも安心して過ごせる訪問看護や訪問リハビリの体制づくり。ベッドの上でもできる「セルフリハビリテーション」のメニュー開発なども取り組みのひとつだ。まだまだ医師もスタッフも足りないということだが、地域にとっても働くスタッフにとっても理想的な病院に向けて、着実な歩みを続けている。

尾﨑病院3つの柱

1 **検診・外来の強化**
早期の発見、治療と啓蒙活動で地域の健康に貢献

2 **リハビリの強化**
生活に根ざしたリハビリメニューで在宅復帰を支援

3 **訪問の強化**
自宅でも安心して暮らせる訪問看護、訪問リハビリの充実

医師たちが自由に利用できるカフェスペース。

DATA

医療法人社団 尾﨑病院
見学などのお問い合わせ先

医療法人社団
尾﨑病院
〒680-0941
鳥取県鳥取市湖山町北2-555
TEL:0857-28-6616
FAX:0857-31-0730
URL:http://www.ozakihp.or.jp/

鳥取しゃんしゃん祭に参加。ユニフォームの背中には尾﨑理事長のファーストネーム「舞」の文字。

鳥取の研修医たち

Our Story

山陰労災病院

勤労者の健康を維持するための予防医学プロジェクトを推進。地域住民のための救急医療にも積極的に取り組んでいる山陰労災病院。毎年5名の研修医を受け入れている。研修2年目で、子育てもしながらキャリア形成を行う朝倉先生と指導医である内科部長の前田先生にお話を伺った。

〈研修医2年目〉
朝倉先生

〈指導医〉
前田先生

高校生のときに児童精神科医を目指す

〈研修医〉朝倉先生　私が医師を目指したのは高校生のときでした。順番が逆ですが、医師よりも先に、児童精神科医になりたかったのです。当たり前の話ですが、児童精神科医になるためには、医師になり、精神科医にならなければなりません。そこで医学部を目指しました。

私が高校生の頃、新聞やニュースを賑わせていた話題のひとつが、児童の虐待やそれに伴ううつ病などの病気でした。自分の周囲にも、家庭環境の影響で高校に通っていない人がいて、話を聞く機会がありました。本当は普通の高校生に憧れていても、それができない状況にあり、心に傷を負っていることを知りました。こういったエピソードも、児童精神科医を目指した動機のひとつです。

児童精神科はアメリカでは当たり前にある分野でしたが、当時の日本にはあまりありませんでした。だからこそ、自分が児童精神科の医師になって、問題と向き合いたいという気持ちがあったのです。

研修医／研修2年目

朝倉 静林 あさくら しずり

2013年　宮崎大学医学部卒業
2013年　山陰労災病院にて研修医
● 趣味：子どもと遊ぶこと

その後日本では発達障害がクローズアップされ、その診療を担う脳神経小児科にも注目していました。精神科か小児科か迷う部分もあり、色々な先生に相談しています。

出産、子育て、自由なプログラム

〈研修医〉朝倉先生　鳥取を研修に選んだ理由は、結婚して子どもが生まれたため、自分の実家の近くで暮らす必要があったことです。その上で、この病院を選んだ理由は、当直義務がないこと、忙しい病院であり、症例数が豊富なこと、コモンディジーズが診られること。それから、研修2年目のプログラムを自分で組めるという自由度の高さです。当直は、子どもを抱えている私には難しいと感じていました。別に候補として考えていた病院は研修医の当直は義務でした。私は負けず嫌いなところがありますから、その病院に行っていたら、当直をこなし、自分にかなりストレスがかかっていたのではないかと思っています。大学病院

についても考えましたが、この病院の初期研修2年目に鳥取大学医学部附属病院での研修が予定されていたので、その時にまわろうと考えました。

〈指導医〉前田先生　当院では身体的な負担がかかりすぎるので、原則は22時までの勤務で、当直は希望者だけとなっています。救急が多い病院であり、米子市内の救急患者の6割近くは当院に運ばれてくるのではないでしょうか。それだけに、初期研修2年の間に大きく成長してくれます。私は1年目の研修医には「やってみせる」、2年目には「やらせてみる」というスタンスです。ある意味、理想的ではないかと思っています。当院で救急を経験すると即戦力になれるのではないでしょうか。

〈研修医〉朝倉先生　2年間を通じて日直があるので、救急に関しては、1年目の自分と比べて成長を感じることができます。

「医者は天職」という明るい言葉

〈研修医〉朝倉先生　影響を受けた医師はたくさんいるのですが、最近であれば、この病院の先輩方

です。診療経験が豊富な先生が多く、日々色々なことを学んでいます。例えば、毎日ひとつ課題を出してくれる先生がいらっしゃいます。常にしっかりした根拠を持って治療しなければいけないと教えられているように感じています。また、別の先生は、根治が難しい患者さんの担当をするときに「正解がないこともある、早計に決めちゃダメだよ」というアドバイスをいただいたことがあります。

前田先生の言葉で印象的だったのは「医者は天職」という言葉です。私が家庭と仕事の両立で悩んでいた時期に、色々な先生に医者という職業についてどう感じているのか質問していたことがあるのですが、前田先生が明るく「天職」と言ったことは本当に印象に残っ

ています。

〈指導医〉前田先生　その発言は実は憶えていないのですが、そう思っていることは確かですので、言ったことは間違いないでしょう(笑)。私が大事だと思うのは、色々な先輩を見ることで、自分が目指す医師像を作り上げていくことだと思います。周囲のすべての医師が教師になり得ると思います。

若いうちは学問的なことや技術的なことを重視しがちですが、年齢が進むと、もう少し広い範囲で考えるようになります。人間性こそが大事だと考えるようになるのです。そうなると、答えは教科書やガイドラインには載っていません。経験が大切になりますから、一つひとつの経験を大事にしながら、学んで欲しいと思っています。

山陰労災病院

〒683-0002 鳥取県米子市皆生新田1-8-1

山陰地方の勤労者医療を行う病院であり、質の高い医療を提供する地域中核病院。被災労働者の治療と早期社会復帰促進を図るため、リハビリテーション医療に早くから力を入れ、現在では、職業性疾患、成人病等の対策の一環として内科系を充実させている。

医師としての大切な経験

〈研修医〉朝倉先生　患者さんで印象に残っているのは、ご高齢の男性の方です。入院された当初はこちらが話しかけてもほとんど応えていただけなくて、少し傷ついたりしていたのですが、それでも毎日通って、やっと話していただけるようになりました。最後には悩みを打ち明けてくれるようになり、患者さんと心が通じ合えた気がしました。

〈指導医〉前田先生　それは良い経験をしましたね。医師を続けていく上での動機付けになるようなことだと思います。例えば、私はご高齢の方と接するときなど、丁寧語を使わないこともあります。あえてそうすることで、距離が縮まるのを感じるのです。これも医師としてのひとつのスタイルでしょうね。朝倉先生がこういうスタイルを取り入れるかどうか、自分に合っているかどうかも、これから決まってくるのではないでしょうか。

バランスのとれた医師に成長して欲しい

〈研修医〉朝倉先生　この病院は部門間の垣根もないし、スタッフの方も気軽に声をかけてくれます。とくに子育ての先輩である看護師さんがたくさんいるのが心強いです。「お子さん大丈夫?」の一言で救われたこともあります。この病院の皆さんのような優しい気持ちを持って、さらに一人前の技術や知識を持った医師になりたいです。

〈指導医〉前田先生　朝倉先生の言うように、患者にも慕われ、医学的な向上心もある、そして、他のスタッフとも良好な関係が築ける、バランスのとれた医師に成長して欲しいと思います。これからも仕事と家庭のバランスにも気をつけて、前に進んで欲しいですね。

朝倉先生の診療を見守る前田先生

指導医／山陰労災病院内科部長

前田直人　まえだ なおと

1985年　鳥取大学医学部卒業
1989年　鳥取大学大学院医学研究修了
1989年　鳥取大学医学部附属病院勤務
1990年　六日市病院勤務
1990年　公立社病院勤務
1991年　国立浜田病院勤務
1996年　鳥取大学医学部附属病院勤務
2012年　山陰労災病院勤務
　　同内科部長

● 趣味:読書、ゴルフ

鳥取県で働いてみませんか。

見学を希望される方へ

県外の方で病院見学を希望される場合は、旅費を支給します。

鳥取県は医師のキャリア形成、子育て後の復職などについて積極的に支援しています。

地域医療に関心のある方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（ローテートコース）

複数の公立病院等をローテートしながら、鳥取の医療の現場を経験できます。（その間に研修を行うことができます）

子育て等で現場を離れ、復職を考えている方へ

鳥取県医師登録・派遣システム（子育て離職医師等復帰支援コース）

鳥取大学医学部附属病院ワークライフバランス支援センターと協力し、現場復帰のための研修を県立病院、鳥大附属病院等で行います。
研修後の復職についても、仕事と家庭の両立に配慮した医療機関を紹介します。

キャリア形成を考えている方へ

鳥取県専門研修医師支援事業

県外の医療機関に県職員として研修派遣します。

鳥取県内の求人情報を探している方へ

県内医療機関の求人情報の提供、あっせん、紹介を行います。

http://www.pref.tottori.lg.jp/iryouseisaku/ 鳥取県 医師確保 検索

鳥取県で初期臨床研修をしませんか。

鳥取県は県と県内臨床研修病院が協議会を立ち上げ、研修医のための様々な取り組みを行っています。また、医学生が県内臨床研修病院を見学する場合には旅費を助成しています。

鳥取県臨床研修指定病院協議会の事業

- 研修医の受講する救急講習（ACLS、BLS、ICLS、JMECC）受講料を助成します。
- 年1回各病院の研修医が集まる研修医交流会を開催します。
- 研修医を対象とした著名講師による臨床研修医セミナーを開催します。
- 鳥取県東部4病院（県立中央病院、鳥取市立病院、鳥取赤十字病院、鳥取生協病院）にマッチングした研修医は、様々な特色を持つ4病院で希望に応じた研修を行うことができます。

鳥取県臨床研修指定病院協議会のホームページをぜひご覧ください

鳥取県の臨床研修病院の魅力を知っていただくため、ホームページを作成しています。各病院の最新情報、プロモーションビデオなど魅力満載ですので、ぜひご覧ください。

http://www.tori-rinsyou.jp/index.php 鳥取県 臨床研修 検索

このみずみずしさを未来へ 鳥取県

お問い合わせ
鳥取県福祉保健部健康医療局医療政策課医療人材確保室
〒680-8570 鳥取県鳥取市東町1-220
TEL:0857-26-7195　FAX:0857-21-3048　Mail:ishikakuho@pref.tottori.jp